

# 外国語活動・英語科

天野紳一・鈴木悦子・赤松 猛

## I はじめに

東雲小学校・東雲中学校（以下、本校）は、これまで5年間（平成22～26年度）にわたって、「小・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方」を研究主題として、小・中学校の教員が協働して実践的研究を行ってきた。そして、本年度より『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造－協働的問題解決ができる子どもの育成をめざして－というテーマで研究を行うことになった。グローバル化された時代を生き抜く力を Griffin ら（2014）は21世紀型スキルと呼び、創造性とイノベーション・批判的思考・メタ認知・コラボレーションをはじめとした10種類のスキルとして提案した。同様に、国立教育政策研究所（2013）では、これからの時代をきりひらく市民として日本人に求められる能力を21世紀型能力と呼び、基礎力（言語スキル・数量スキル・情報スキル）、思考力（問題解決・発見力・創造力・メタ認知など）、実践力（自律的活動力・人間関係形成力など）が示された。

これらのスキル・能力は、これまでの研究で本校が育みたい力として設定してきた多元的価値観を受容する力・表現コミュニケーション力・意思決定力という3つの力と重複する部分が多く、本年度から始まる研究もこれまでの実践の延長線上に位置すると考えている。本校では、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を「さまざまな文化や価値観を理解し、認め合いながら、自分の考えを明確にして、問題を解決する力」と定義して、その力を育成する方略のひとつとして、協働的問題解決を取り上げることにした。協働的問題解決について、OECD（2013）は「2人以上の行為者が解に迫るために必要な理解と努力を共有し、解にいたるために必要な知識とスキル、労力を出し合うことによって、問題を解決しようと試みるプロセス」と定義している。

研究主題は新しくなったが、上述のように、本校がめざす教育が変わったわけではない。本校の英語科がめざす中学校卒業時の生徒像は、初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができ、英語に関する知識・技能が深まっており、4技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）を駆使して、状況や相手に応じて適切に英語を使うことのできる生徒である。学習指導要領（総則）にも述べられている通り、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う」ことが求められている。また、知識・技能の習得と問題解決（活用）のための思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することや言語活動を重視することが求められている。従って、英語科においては、「言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動」（活用の側面）と「言語材料について理解したり練習したりする活動」（知識・技能の習得の側面）の言語活動をバランスよく授業に組み込ながら、英語力を養成していく必要がある。

教科の特性とも言えるが、英語科の場合、「知識」と「技能」は簡単には切り離すことができない。すなわち、技能を高めるためには正しい知識を習得することが必要である。例えば、必要な語彙や文構造を知らなければ、正しい英文を生成して話すことは決してできない。さらには、適切に英語を使用することができなければ、相手と情報交換や意思疎通を行いながら、共に思考し、適切に問題解決を行うことは困難になる。このように、英語の授業においては、技能や活用の基盤となる知識の習得が重要な位置を占めていると言える。ただし、このことは知識を完璧に習得していなければ、英語が使用できない、英語を活用させるべきではないということを意味しない。英語を使用しながら、活用しながら、英語力を向上させていく方法を考えていかなければならない。

## II 本年度の研究計画

### 1 研究の目的

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う英語の授業づくりをめざすことを目的とする。今年度は、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」のうち、英語科で育成できる資質・能力は何かを探るとともに、英語科授業において協働的問題解決をいかに活用することができるかを検討する。

### 2 研究の方法

今年度は「グローバル時代をきりひらく資質・能力」に関連した授業づくりの視点として、次の5つを設定した。ただし、1つの授業にすべての視点が盛り込まれるわけではない。①創造力：与えられた題材に関して自ら問いを立てたり、考えを共有する過程において他者との違いを認識したりする。②思考力：英文を読んだり聞いたりして、状況を想像したり、与えられた英語から推論したりする。③メタ言語能力：自らが学んでいる内容について、意識的に説明する。品詞を識別したり、言語規則を発見したりすることを含む。④コミュニケーション力：英語または日本語で、他者の考えを理解し、自らの考えを他者に適切に伝える。英語で伝える際には、言語の形式・意味・機能を理解した上で使用する。⑤コラボレーション：ペアやグループで力を合わせて課題を解決する。

### 3 当日の授業

#### ①小学校5・6年生（複式高学年）

与えられた英語の音声情報と文字情報に基づいて、1つの部屋を想像させる活動を行う。異学年のペアから構成されたグループ内で互いに相談しながら絵を完成させる作業を通して、前置詞や形容詞の意味をはじめとした、英語についての多様な気づきを促したい。

#### ②中学校1年生

通常扱っている題材よりやや長めの対話を読んで、場面や状況を想像させたり、書かれている情報に基づいて内容を推論させたりする。ペアやグループで考える時間を設定して、個人や集団の思考が深まるような授業を展開したい。

#### ③中学校2年生

普段使用している教科書ではなく、O. Henry の *After Twenty Years* を題材として学習する。初めて見る英語の小説をグループで協力して、疑問を持ちながら読み進ませる。また、O. Henryらしい意外な結末を想像し楽しむことで、英文読解の魅力に触れさせたい。

### 参考文献

Griffin, P., McGaw, B., Care, E. ed, *Assessment and Teaching of 21st Century Skills* , 三宅なほみ他 (訳), 21世紀型スキルー学びと評価の新たなかたちー, 北大路書房, 2014.

国立教育政策研究所, 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則, 新教育課程編成に関する基礎的研究 研究成果報告書5, 2013.

OECD, PISA 2015 DRAFT COLLABORATIVE PROBLEM SOLVING FRAMEWORK, 2013.